

國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集

## 『昭和前期の神道と社会』

昆野 伸幸

—

敗戦に至るまでの昭和の戦前期、とりわけ国体明徴運動以降の昭和十年代は、社会のいたるところに国体論が浸潤した時期といえる。とりあえず国体論を、日本の独自性を万世一系の皇統に求め、アマテラスが皇孫に与えたいわゆる天壤無窮の神勅に代表される神代の伝統と、歴史を一貫して変わらぬ国民の天皇に対する忠誠心とが「国体」を支持してきたと強調する議論だと捉えれば、近代の神道論と国体論とは十分な接点をもつ。実際、これまで村上重良『国体神道』（一九七〇年）に代表されるいわゆる「広義の国家神道」論は、国体論を「国家神道」の重要な構成要素と見なしてきた。しかし、『国家神道』は、「国家神道」の復活

を阻止せんとする一九六〇年代における村上氏の課題意識を踏まえた問題史的著作でもあり、実証的にはもはや通用しない点も少なくない。村上「国家神道」論を批判的に継承した島蘭進『国家神道と日本人』（二〇一〇年）も、村上氏が最もこだわった肝心の「ファシズム期」（昭和六〜二〇年）の叙述が不足するという転倒ぶりを示しており、極端な話、当該期の「国家神道」像としては、神社参拝の強制に示されるような個人の内的自由への抑圧の激化が想起される程度で、実は「昭和前期」（昭和元〜二〇年）における神道・神社の実像や社会との関係については必ずしも十分な実証的研究が積み重ねられてきたとはいえない。

これに対し、いわゆる「狭義の国家神道」研究においては、神社神道や神社政策が優先的な分析対象となり、国体論のみならず、皇室神道や「右翼在野神道」（葦津珍彦）といった主に大正期以降に新たな展開を示す要素はあくまで第二義的な検討対象にとどまってきた。そのためもあってか、これまで「狭義の国家神道」研究はほぼ明治期を取扱い、大正・昭和期にまでその検討対象を広げることにはあまりなかったといえる。結果として狭義であろうと広義であろうと「国家神道」を研究するうえで間違いなく重要な神祇院に対してすら先行研究は少ないというのが現状である。しかし、近年では、大正・昭和期における神道の諸相に

対する関心が高まり、これまで近代神道研究とはあまり接点をもたなかった国体論研究と「国家神道」研究が交錯しつつある、興味深い展開を示している。このような潮流を力強く牽引する諸氏が執筆者として参加し、当該分野の第一人者である阪本是丸氏によってまとめられたのが本書『昭和前期の神道と社会』である。

## 二

本書の構成は以下の通りである（論文題目のあとの丸数字は評者による）。

### 序

昭和戦前期の「神道と社会」に関する素描——神道的

イデオロギー用語を軸にして (1) 阪本是丸

### 第一部

照本亘と『皇国』——大正期・昭和初期の神社人の言

説 (2) 藤本頼生

河野省三の時代認識と神道学構想 (3) 高野裕基

今泉定助の思想と皇道発揚運動 (4) 武田幸也

葦津珍彦小論——昭和初期における一神道青年の軌跡

(5) 藤田大誠

天野辰夫の天皇観・神道観について (6) 東郷茂彦

星野輝興・弘一の神道学説をめぐって (7) 神杉靖嗣

難波田春夫の国体論——戦時経済論と記紀神話解釈

(8) 菅 浩二

藤澤親雄の国体論——戦前期を中心に (9) 上西 亘

大串兎代夫の帝国憲法第三十一条解釈と御稜威論

(10) 宮本誉士

武田祐吉の学問態度と〈万葉精神〉 (11) 渡邊 卓

萩原龍夫と国民精神文化研究所・教学錬成所 (12)

大東敬明

真宗僧侶伊藤義賢の神道論 (13) 戸浪裕之

神道神学者・小野祖教の誕生 (14) 赤澤史朗

### 第二部

神社行政における「国家ノ宗祀」 (15) 河村忠伸

埼玉県神職会と氏子崇敬者総代会について (16)

半田竜介

戦中期における皇典講究所祭祀審議会の活動 (17)

齊藤智朗

戦時期村役場文書にみる無格社整理——新潟県矢代

村・上郷村を事例に (18) 畔上直樹

二・二六事件と「八紘一字」——道義性と政治性の分

岐点 (19) 黒石昭彦

海外における日本神話研究——ファシズム期の視点か

ら (20) 平藤喜久子

戦時期の国語世界化と国学(21) 川島啓介

軍学校における校内神社の創建とその役割(22)

坂井久能

陸軍における戦場慰霊と「英霊」観(23) 中山 郁

「国家神道」と特別高等警察(24) 小島伸之

あとがき 宮本誉士

年表

本書は、第一部に人物・思想を扱った論文、第二部に制度・組織を扱った論文を収めた、総勢二四名の執筆者からなる大部の論文集である。以下、内容の紹介を行いたい。紙数に限りがあるため、過不足のない精確な全体の要約は断念し、各論文において評者に興味深く思われた点を中心にごく簡単にまとめた。

まず「序」では、「昭和前期」(戦前・戦中期)における神道と社会との関係性を実証的に説明する研究の欠如を指摘したうえで、当該期の「神道的イデオロギー」の言論に関する多様な人物や組織の具体的事例に即して、個別的かつ総体的に捉えるという本書の問題意識を示す。①は、本書全体の総論に当たり、「神道的イデオロギー」やその用語(「天壤無窮」「祭政一致」「皇道」等)が、満洲事変以降の時勢を背景にこれまでに以上に社会に広がるとともに、日本「国内」限定のものから「普遍」的価値をもつものへと拡

大したと論じる。②は、全国神職会の機関誌『皇国』にて長期間主筆(編輯主任)を務めた照本金川こと照本直を取り上げ、『全国神職会会報』以来の機関誌の変遷を踏まえたうえで、とくに彼の社会主義に対する考えを明らかにした。③は、埼玉県の神職、神道学者の河野省三を取り上げ、彼の神道学研究の背景には、独自の問題意識(神職が学問し、人格を修養することで神社・敬神の意義が高まる)があつたことを指摘した。④は、神道界の「大御所」今泉定助が内務省流の「神社非宗教論」を批判し、神社祭祀に精神性を付与すべく様々な活動を展開し、皇道論を説いたものの、その社会的広がりには限定的であつたことを指摘した。⑤は、戦後神社界に大きな影響力をもった神道思想家の葦津珍彦が昭和七年、社会主義と訣別した後、国家改造を志す改造日本社周辺の青年同志と交わつたさまを解明した。⑥は、昭和八年七月、神兵隊事件の総帥を務めた天野辰夫の人物像と思想形成に着目し、彼が上杉慎吉の影響を受け、我的存在を「民族我」と捉えつつ、「皇道」を唱え、戦後も持論を堅持したことを論じた。⑦は、昭和一七年、神典擁護運動によって排撃された宮内省掌典の星野輝興とその子息弘一の神道説が、今泉定助と異なり、造化三神を否定し、アマテラスの至高性を説くものであり、政府に一時的に利用されたこと、星野説を最も徹底的に批判した松永材の論

理を明らかにした。⑧は、経済学者の難波田春夫の著『国家と経済』全五巻に即して、彼が経済一般から日本の特殊条件を見つげるため、『古事記』を中心に古典を学び、国体の問題に行き着いたと論じる。⑨は、大國隆正の影響を受けた政治学者・藤澤親雄の皇道論に注目し、彼が「超古代文献」を引用し、日本による全世界統治を主張するも、批判を受けて偽史から訣別したことを指摘した。⑩は、カール・シュミットの学説に触発され、「非常大権論」を構築した憲法学者・大串兎代夫が、「稜威」論を背景に天皇親政を説いたことを明らかにした。⑪は、国文学者・武田祐吉の台湾での講義録『万葉に顕現せる日本精神』（昭和二年）と、その改訂版『万葉精神』上巻（昭和一八年）、『万葉自然』（昭和二一年）とを比較し、基本的に大きな変化は見られないことを指摘した。⑫は、国民精神文化研究所囑託として神道大系編纂に従事した萩原龍夫が、松本彦次郎、肥後和男の影響のもと中世神道研究を行い、のち民俗学の研究法の重要性に気付いていく過程を描いた。⑬は、真宗本願寺派の学僧・伊藤義賢が、島地黙雷以来の「神道非宗教」論の系譜に立ち、祭神を「宗教的」なものとする『旧神明観』を批判し、「道德的」に捉える『新神明観』への転換を唱えたことを解明した。⑭は、敗戦後、神社本庁の教学を代弁することになる小野祖教の「ファシズム期」

の言説に注目し、彼が哲学的な新たな神道理論を打ち立てようとするとともに、斬新な神社再生案を提示するものの、徐々に日本主義的な方向に転向していくさまを明らかにした。

⑮は、「国家ノ宗祀」の意図する神社の国家管理が大正期までに制度化がなされたものの、神社関係者はさらに神社の本質追求を求めたため、神祇院では調査・監督の機能が強化されたと論じた。⑯は、明治四四年に結成された埼玉県神職会が神社由緒調査に取り組み、敬神思想涵養に努めるとともに、郡単位で結成されていく氏子崇敬者総代会と連携して様々な活動を展開していったことを解明した。⑰は、昭和一六年八月、祭政一致の具現化のため、祭祀の本義の解明を目的に皇典講究所に設置された祭祀審議会が、宮中祭祀・神宮祭祀・神社祭祀の統一という祭祀全般を含めた神祇行政の統一を志向したことを指摘した。⑱は、神祇院の無格社整理政策が戦争末期ですら十分政策実現が可能だったと判断されるものであり、実際に実現寸前の段階にあったものの、敗戦後神祇院の廃止によって、全体としては何もなかったかのように見えていただけではないかと問題提起を行った。⑲は、二・二六事件の当事者・関係者（石原莞爾・相川勝六・平泉澄）の思想を分析し、元々「道義性」を多分に含む「八紘一宇」が二・二六事件を契機に戦

争用語としての「政治性」を増していったことを論じた。⑳は、「ファシズム期」（一九二〇年代～一九四五年）におけるイギリス・アメリカ・フランス・ドイツ・オーストリア・イタリアでの日本神話研究について、地域ごとの特徴を述べるとともに、キリスト教関係者による研究が多いことを指摘した。㉑は、山田孝雄・松尾捨治郎・時枝誠記・島田春雄、志田延義ら国語簡易化に反対した学者（「国学者」）の国語観を分析した。㉒は、陸海軍諸学校に設けられた校内神社を取り上げ、その多くが昭和十年代の時期に集中して創建されたこと、また創建の目的は主に精神教育とされたことを明らかにした。㉓は、戦時期における前線の陸軍部隊の慰霊の諸相を検討し、「英霊」が部隊にとって戦死者の靈魂とそれが宿っているモノ（遺体や遺骨など）を指すのであり、「英霊」即ち「神」ではないことを指摘した。㉔は、特別高等警察による宗教取締は、立憲君主制や総力戦体制の守護を目的とする「世俗的」性格が基調であり、神社神道を基体とした「国家神道」とは本来関係ない」と論じた。

### 三

本書の特長として第一に挙げるべきは、目次を一瞥するだけでも明らかなように、極めて幅広い、世代の異なる人

物と多様な制度・組織を取り上げていることである。河野省三、今泉定助、星野輝興、小野祖教、県神職会、皇典講究所、軍施設の校内神社といった、近代の神道・神社を考察するうえで不思議でない、むしろ当然ともいえる人物・組織のみならず、難波田春夫、藤澤親雄、大串兎代夫ら社会科学者、武田祐吉、時枝誠記ら国語・国文学者、天野辰夫ら右翼、二・二六事件当事者、伊藤義賢のような真宗僧侶など神話や祭祀について言及している知識人・軍人・宗教家や、戦場慰霊、特別高等警察といった制度・組織が検討対象とされている。かつて島蘭進氏は「確かに田中智学のように仏教と国体思想を結び付けた論者や、近代政治思想や法思想に儒教的な理念や国体思想を結び付けた論者もいる。それらすべてが、国家神道の言説だとする必要はない」（島蘭進「阪本是丸編『国家神道再考』—祭政一致国家の形成と展開」『宗教研究』八一巻二輯、二〇〇七年九月、二七四頁）と断言したが、本書では「広義の国家神道」からさえ除外された藤澤・大串のような政治思想・法学者が検討の俎上にのせられる一方、他方ではむしろ神社や神職といった定番の存在を分析対象とする論文のほうが少ないのである。

このような対象の幅広い選択自体が、近代の神道＝国家管理された神社神道（＝「狭義の国家神道」と捉え、そこ

で自足してしまう単純な見方を排し、近代の、とくに「昭和前期」の神道のもつ多様で豊かな諸相をまずは具体的事例に即して実証的に明らかにしようとする本書の基本的態度を明瞭に示しているといえよう。本書で取り上げられた神社・神職・神祇院施策をめぐる分析にしても、「無精神な、世俗合理主義」「無気力にして無能」(葦津珍彦『新版 国家神道とは何だったのか』神社新報社、二〇〇六年、一七〇頁)というイメージを打破、あるいは再考を迫る成果を生み出している。

本書の責任編集者・阪本是丸氏は、かつて自身の研究を「宗教行政という観点から問題をとらえる」「狭い国家神道概念」によるものだと批判した島藺氏に対して「『宗教行政という観点』のみで『国家神道』研究は必要十分であるということ」と、「『国家神道』を研究するには、まさに字義通り『国家の神道(宗教)政策・行政』を研究の始点に据えることが研究上の十分ではないが、最低限の必要条件である、との『観点』からする研究とは厳密な区別がなされて然るべきであろう」(阪本是丸『近代の神社神道』弘文堂、二〇〇五年、一九三頁)と反論している。本書の執筆者の一人である藤田大誠氏も、島藺『国家神道と日本人』刊行以前、自身のアプローチについて、「神社非宗教論」が確立し、明治三十三年に内務省神社局が新設されたことを以て

「国家神道」の成立と見なす捉え方を「必要十分条件」としてではなく、最低限の「必要条件」として考える(所謂「狭義の国家神道」)。その上で、(中略)島藺進の議論を踏まえ、「狭義の国家神道」と「広義の国家神道」に含まれる諸要素との「境界線」を常に意識し、国家管理された神社神道それ自体の「包括的拡大志向」にも十分留意しつつ、諸要素の相互関係を含めた歴史的経緯やその管轄の相違などに十分留意して、「国家神道」の制度と思想・イデオロギーを再検討するというもの」(藤田大誠「国家神道と靖国神社に関する一考察——近代神道における慰霊・追悼・顕彰の意味」國學院大學研究開発推進センター編『慰霊と顕彰の間——近現代日本の戦死者観をめぐって』錦正社、二〇〇八年、四一頁)と説明していたが、本書はまさにかかる視点が実現された具体的・実証的成果といえる。制度と思想・イデオロギーとの両面を分析した本書は、まさに「狭義の国家神道」を踏み越えたものであり、本書の刊行を以て「国家神道」研究は新たな段階に至ったといえる。今後阪本氏らの立場を単純に「狭義の国家神道」論を代表するものと理解するような安易な研究史整理の仕方は厳に慎まねばならないだろう。

また本書における第二の特長は、従来必ずしも研究の蓄積が多くなかった「昭和前期」の時期に焦点を当てて、神道の諸相を実証的に論じた点である。その結果、様々な新

しい知見や刺激的な問題提起が示され、当該分野における研究水準を格段に引き上げるとともに、今後の研究の方向性にも重要な示唆を与えることになった。とくに⑮が提起した神祇院施策の評価は、藤田大誠氏をして「最早「国家神道」の語に拘泥することなく、改めて共有し得る議論の（土台）を構築するしかない」（藤田大誠「国家神道」概念の有効性に関する一考察——島蘭進著『国家神道と日本人』の書評を通して）『明治聖徳記念学会紀要』復刊四八号、二〇一一年、三〇一頁）と言わしめている、狭義か広義かといった二項対立的な見方で争いがちな「国家神道」研究のやや不毛な現状をこえて、閉塞しつつある研究状況に重要な一石を投じるものであり、共通の（土台）の構築につながる生産的な論争が今後活発に生じることを期待したい。

そして、あわせて留意すべきは、本書が「昭和前期」を直接の対象とすることは当然としても、それにとどまらず、昭和後期（敗戦後）の流れもある程度視野に入れて論じている点である。本書で取り扱われている葦津珍彦、萩原龍夫、小野祖教など比較的若い世代は、むしろ「昭和前期」よりも昭和後期（敗戦後）のほうが重要な活動をしたといえようし、また戦後も持論を堅持した天野辰夫ら右翼活動家、戦前のウィーン学派の研究を戦後再評価した岡正雄ら民族学者、一部戦後も生き残った校内神社などの本書の示

す知見を踏まえれば、神道をめぐる「昭和前期」と戦後との関係は複雑で、画一的な理解はできないことがうかがえる。

この点を踏まえれば、⑳を例外として明示的ではないが、先に述べた第一の特長とも相まって、本書には「狭義の国家神道」論を批判し、戦後における「広義の国家神道」の存続を説く島蘭「国家神道」論に対する強烈な批判が内包されていることに注意する必要がある。

#### 四

本書は多くの貴重な指摘や示唆を与えてくれるが、人数による論文集の常として、最低限の共通了解を除けば、かなり多様な見解が提示されているし、概念や用語の意味内容が執筆者の間で厳密に統一されているわけでもないようである。国体論と神道論との関係、また神道と「国学」との関係などはどうしても気になるし、また個別の論文ごとに疑問を抱く点がないわけではないが、ここでは割愛し、あくまで本書全体に関わる点について少々無い物ねだりをしてみた。

その要望は、先述した二つの特長の裏返しとして、本書においては基本的に多様な人物、組織が個別論文ごとに分散されたうえで、主に「昭和前期」の時期を対象にして検

討されていることに起因する。もちろんまずは個別実証に徹するという本書全体の方針は理解できるものの、やはりこれらの個別事例を「昭和前期」とどまらず、より大きな近代神道史の流れのなかに位置づけるといふ困難な作業に対する見通しを期待してしまふ。というのも、本書は「昭和前期」の時期を対象としつつも、本書に収められたいくつかの論文を読めば、むしろ大正期の重要性・画期性もまた浮かび上がってくるためである。そもそも今泉や星野らの思想は、大正期に新しい展開を示しており、「昭和前期」における彼らの思想は大正期からの延長として理解できる。「昭和前期」という時期を、近代神道史固有の流れのなかに位置づけるためには、まずは大正期と「昭和前期」との関係をどのように理解し、大正期をいかに捉えるのかというこれまた困難な問題が伴う。

無い物ねだりであることは十分承知しているが、近現代の神道をめぐる歴史は、当該期の日本の精神史全体の流れと関わる、むしろその流れを最も端的に体现するものであったと思われる以上、近代神道の歴史的位置づけは、本書に限らず、当該分野共通の課題として受け止めていくべきであろう。

そして研究史的に見れば、このような大きな課題を設定するうえで焦点となるのはやはり「国家神道」という概念

だろう。④・⑧・⑩・⑫・⑭などが直接言及あるいは示唆するように、本書では、単に個別事例にとどまらず、「国家神道」理解の枠組みと密接に関わる重要な人物、組織が分析されている。とはいえ、論文の多くは「国家神道」概念に触れることなく個別実証に徹しており、その他にしても、明確に「国家神道」概念を否定する⑧以外は、あくまで先行研究整理の一環として「国家神道」概念に言及するものの、自己の最終的判断は保留するという傾向も認められ、評価は様ではない。本書は間違いなく「狭義の国家神道」論から大きく跳躍した内容をもつが、具体的に「広義の国家神道」論との「境界線」を見定めて、一定の全体像や見取り図を提示する段階にまでは至っていないように見受けられる。

もちろん一足とびにそこまで求めなくとも、本書で取り扱われている人物は個人レベルをこえて様々なグループ分けが可能だろう。例えば河野省三、大串兎代夫、藤澤親雄、萩原龍夫は国民精神文化研究所グループとしてまとめられ、そこに何らかの「神道」観をめぐる共通理解あるいは齟齬が含まれていたのか知りたいところである。また国家改造運動において建設面を担った（期待された）という点で、世代の開きはあるものの、天野辰夫と葦津珍彦は同じだし、その葦津が師事した今泉定助は、神学解釈のうえで星野輝

興と対立し、天野・葦津らによって神典擁護運動が惹起される。「境界線」を探る際には、これら組織や運動に関わった個人の思想史的研究を踏まえたうえで、組織・運動の全体像を明らかにする営為が必要になってくるだろう。

以上、圧倒的な情報量をもつ本書が提示する新たな解釈、貴重な示唆にもかかわらず、ピントのずれた評、単なる無い物ねだりになってしまった点について、責任編集者および執筆者の方々のご寛恕を請う次第である。

（弘文堂、二〇一六年二月、A5判、六八二頁、八五

〇〇円＋税）

（神戸大学大学院国際文化学研究所准教授）